

目 次

はしがき 5

第一章 知的意味 9

1 意味と体系 9

2 意味体系と語彙体系 20

第二章 評価的・感情的意味 42

1 語彙における感情的要素 42

2 花の感情表現 59

3 評価度と感情的意味 69

4 感情的意味の数量化 79

5 雨の感情表現構造 97

第三章 文法的意味 115

1 基礎語彙としての人代名詞 115

2 文法の重視されない語彙 123

第四章 表現的意味	137
1 文章にみる意味の流れ	137
2 文章の意味的類似性	144
3 俳句意味論	151
4 表現と認知類型	167
第五章 文体的意味	180
1 明治中期の特徴	180
2 文体要素	191
第六章 位相的意味	201
1 若者ことば	201
2 位相語研究の視点	213
第七章 意味の変化	218
1 意味の変化	218
2 近代語と方言	221
第八章 地域的意味	233

1 ユキの意味と方言	233
2 意味の地域性	246
3 子供たちの文化	258
第九章 行動的意味	267
1 言語行動の要素	267
2 構成要素	272
3 言語行動と構成要素の流れ	287
4 意味の伝達	295
第十章 文化的意味と認知	310
1 認知類型の調査	310
2 多文化と認知差A	314
3 多文化と認知差B	338
4 映像認知と日本文化の類型	359
参考文献	375
あとがき	379

はし が き

「意味」とは何か。これは、昭和50年代に方言語彙調査を続けていた頃から私の頭を離れたことなかった問題である。音韻や文法と同じように語彙も体系化できると研究仲間から教わったときの驚きは、とてつもなく大きくそして新鮮であった。胸をときめかせながら新しい世界に入っていた。

辞書の意味・知的意味を意味特徴の束として捉え、弁別の特徴を手がかりに、移動動詞語彙、料理動詞語彙、動作動詞語彙、次元形容詞語彙、童遊び語彙、代名詞語彙、古典語彙、方言語彙などを調査対象にして体系化しようとした。「体系のようなもの」を手あたり次第に作りあげていった感が強いのだが、苦勞してマトリックスをつくったのに、必ずといってよいほど、言いようのない不安に襲われた。

グディナフやラウンズベリーは意味を言語形式の「対立の意味」に限定して成分分析した。対立の意味こそが「意味」であるとする定義は、魅力的な感じがしないではない。が、対立の意味に対する「暗示の意味」の方は、いつまでも分析の外に置き去りにしておきさえすればよいのであろうか。

意味の調査を重ねていくうちに、次第に知的意味以外の意味を考えざるを得なくなってきた。研究分野がいたずらに拡大していく羽目になったが、評価的・感情的意味、文法的意思、表現的意思（修辞的意思、連想的意味など）、文体的意味、行動的意思、位相的意思、歴史的意思、地域的意思、文化的意思……とみていくうちに、何種類かの意味に分け多層的な意味階層を設けなければ記述できないのではないかとかわれる事例に遭遇した。意味階層は記憶弧の位置・階層と密接に関係しあっているはずである。その対応の事実を鮮やかに表示する方法が必ず存在するはずである。そうすると、システム工学や医学の分野にまで視野を広げなければならなくなり、共通の研究テーマをさまざまな専門分野から追いつめていく必要が生じ、共同研究というのが当然のスタイルになってくる。情報機器を用いた意

「シヨンやノンバーバル・コミュニケーションの構造化を含めて、意味論確立への道の遠さと厳しさを思感させずにおかない。

意味の世界は混沌としている。本書は、意味の世界を真つ正面に捉えながら、身構えただけで終わってしまったが、より精密な次の研究への布石はいくつかしたつもりである。考えに考えて稿を成したが、結果的には意味の世界の外側の壁を単に複数の方向から写しとっただけだったかもしれない。いたらぬところや解釈の間違いなども多々あるかと思う。忌憚のないご意見ご叱責をお寄せいただければ幸いである。

厳しい出版事情にもかかわらず、武蔵野書院の前田昭社長、編集の長尾宏氏、社の皆さんのお力添えのおかげで、本書の出版にこぎつけることができた。心より感謝申し上げます。

平成八年九月

著者

第一章 知的意味

1 意味と体系

1 アガルとノボル

「松」「竹」「梅」「松竹梅」、「濡れる」「濡らす」「干す」「乾く」「乾かす」……、私たちは生活や思考や行動の中でさまざまな意味の世界と語彙にかかわりを持ち、複雑な認知・判断・記憶あるいは言語コミュニケーションなどを行っている。一見分かりやすそうなのが多いのだが、語彙は意味のどのような部分を担うのか、意味にはどのような種類があるのか、認知が語彙とどのようにかわっていくのか、この重層的な多文化社会を私たちはどう解説し行動化しているのであろうかなど、疑問にかられて少しでも近づいていくと、たちまち困難な壁に行く手を阻まれてしまう。意味の世界とはそれほど神秘的であり続けなければならないのであろうか。今まで見てきた以外の姿は見せてはくれないのであろうか。語史と意味の体系と認知体系と語彙体系とはどのような相関性を有してきたのであろうか。それらはどのような過程で日本人および外国人に習得されてきたのであろうか。新語が部分体系に加えられる時、そこには部分体系によって制限の働くことがあるのだろうか。こうした素朴な疑問と興味を抱かせてやまない対象である。

全体像などは将来のこととして、意味を分節する何かの単位がないことには作業が進まない、ある語ないしは